

令和八年度  
入学試験  
第一回

国  
語

令和八年二月十日

京華女子高等学校

※解答用紙は本冊子にはさんでいます。



【問題は次のページから始まります】

□ 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナをそれぞれ正確な漢字に直しなさい。

- ① ワンガン線せんを車で走行する。
- ② 今年はモウシヨしよで農作物が不作だ。
- ③ そろそろこの本をドクリヨウりゆうできそうだ。
- ④ 屋内ではボウシしを外すようにする。
- ⑤ 美術品を見る目をコこやす。
- ⑥ 恩師んしに向けたフミふみを丹精たんせい込めてしたためた。

問二 ①～⑥の——線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① 彼の言動は私の気持ちきもちを惑まどわせた。
- ② サプリメントの濫用らんようは控くわえるべきだ。
- ③ 古文を口語訳くごやくするのが難がたしい。
- ④ この気持ちを抑おさえることができない。
- ⑤ そんなことだと露つゆとも思おもわず行動こうどうしてしまった。
- ⑥ 研修旅行けんしゅうりょこうの支度したくを調たえた。

□ 次の【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】を読んで後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

朝。目覚まし時計の音に目を覚ます。夢うつつから少しずつ覚醒かくせいして思い浮かべるのは、a、その日の仕事のことだ。仕事を進める前に、準備としてしなければならぬことがいくつもある。あ、そうだ、あれを忘れていた。えっと、どうするのが最も負担が少ないのか。いや、まずなによりも先に、先方に謝らなければならぬ……と、あれやこれや考えながら、顔を洗って、歯を磨いて、トイレに入って、朝食を済ませて、スーツに着替えて、忘れ物はないか、さあ、オフィスに出かけよう……：そのようなことの繰り返しだが、私たちの日常である。

これとは対照的な日常を送る人々がいる。プナンと呼ばれるその人々は、東南アジア・ボルネオ島の熱帯に暮らす、狩猟しゅりょうを主な生業なりいとする人々である。マレーシア・サラワク州を流れるブラガ川の上流域の熱帯雨林に現在、おおよそ五百人のプナンが暮らしている。

赤道近く。そこでは、一年をつうじて、朝六時前後に夜が白々しららと明ける。プナンが蚊帳かやの中で寝ぼけまなこでまず考えるのは、その日の最初の食事で何を食たべるかということである。たしか、(主食注1にする)サゴ澱粉でんぷんがあと少し残っていたはずだ。だが、おろそかでない。どうしよう。ここ二日ほど雨が降ってない。川の水はだいぶ減ったに違ちがいない。投網とあみでもして魚を獲とりに行くとしよう。魚を獲とってから、それをおかずとしてまずは腹はらごしらえと行こう。森の中に狩猟しゅりょうに出かけるのはそれからだ。一日の始まりをめぐるふたつの情景。① 私たちの日常とプナンの日常の間には、大きな隔へだたりがある。現代社会に暮らす私たちは、何らかの職に就いて、その仕事の中に生きがいや目標を見出し、その中で、成功や失敗を経験しながら生きている。そのことよって、私たちは生きていくための、食たべるためのお金を稼いでいる。

それに対して、プナンは、生きるために、生き抜くために食べようとする。実際には、空腹をしのぐために、食べ物を探しに出かける。彼らは、森の中に食べ物を探たすことに一日のほとんどを費つやす。食べ物を手に入れたら調理して食べて、あとは

ぶらぶらと過ごしている。彼らにとって、食べ物を手に入れること以上に重要なことは他にない。生きることと食べることが切り離されていないという意味で、バナナは「生きるために食べる」人々であるということができよう。

②バナナの生き方は、これこれを成し遂げるために生きるとか、世の中をよくするために生きるとか、貧困を撲滅するために生きるとか……、そんな風に生きることの中に意味を見出すようなものではない。彼らはまず「〇〇のために生きる」という言い方をしない。そうした生き方が存在することを、想像することすらないように思われる。バナナは日々、生きるために食べる。生きるためには、食べなければならぬというテーマがあるのみ。そのことが、バナナの日常の中心にどっしりと根を張っている。

③翻つて、私たち現代人は、生きるためには食べなければならぬという人間的・動物的现实を、別のものへとつくり替えてしまっている。私たちは、④生きることを、自らの課している。バナナ流の生き方が、私たちの生き方を照らし出してくれる。

急いで付け加えなければなるまい。現代の私たちの生き方が悪で、バナナの生き方が善であるということではない。

同じ地球上で、同じ時代に生きる人類として、私たちの生き方とバナナのそれとの間に、なぜこれほどの隔たりがあるのだろうか？ そのことを考える上で、解剖学者・三木成夫がひとつの見通しを与えてくれるかもしれない。

⑤三木はアリストテレスを援用しながら、人間を含めてすべての生きものには、栄養を受け取り、消化・吸収し、排出するという過程が備わっていると言う。生きものが生きていられるのは、栄養を摂取することによってである。ヒドラやクラゲのような原始動物は、口から栄養を取り入れて、同じく口から老廃物を排出していた。

【ア】哺乳類になると、口の中で、胃の中で、最後に、肝臓の中でためこむ。

【イ】魚類・両生類・爬虫類では顎が発達し、生きものを丸呑みするものが現れる。

【ウ】脊椎動物になると、消化は脾臓が、吸収は肝臓などの臓器が担うようになる。

【エ】ニシキヘビはウマを丸々一頭呑みこんで、三ヶ月くらいかけて胃の中で消化し、肝臓で栄養をためこむ。ガラガラヘビは毒腺から消化液を出して、呑みこんだラットを四、五日で消化する。

【オ】生物進化の過程で、無脊椎動物のうち軟体動物になると、口腔に消化管ができ、口から栄養を取り入れて肛門から老廃物を排出するようになった。

こうした生きものたちの栄養摂取の特徴は、目の前の食の対象を体内へと取り入れて消化し、吸収するというプロセスにある。それはまた、狩猟し採集する人類の食行動へとつながっている。狩猟採集民の食行動もまた、調理をするが、基本的には、目の前の食の対象を体内に取り入れることから成り立っているからである。

b、三木によれば、このやり方が人類のある段階から変化する。

最後に人類になりますと、大きくなった脳味噌と手を使いまして、からだの外でため込むことをやるわけです。農耕・牧畜の始まりですが、これが結局は穀物の貯蔵と食肉の冷凍保存になる。そしてこれが近代社会になりますともう物ではなく、紙幣で貯め込むようになる。

「三木 二〇一三：一〇四」

⑥「内臓」のみを用いて食行動を行う狩猟採集民に対して、農耕民や牧畜民は身体の外側に食べ物をいわば「外臓」(石倉敏明氏の造語)することによって、備蓄するようになる。農耕・牧畜民は、狩猟採集民のように、目の前にある食料を調理した後、体内に取り入れ、内臓で消化し、吸収するだけではない。穀物や野菜などを栽培し、動物を飼育して、それらを身体の外部的とある場所に外臓した上で、それらに必要な時にいつでも取り出せるようにしておく。

c、農耕・牧畜革命を経て、人間は今度は、身体の外部に穀物や肉の素材である動物をためておくのではなく、貨幣をためるようになった。そして、ためこんだ貨幣を、どこか遠くの別の場所で、匿名とくめいの誰かによって大量につくり出された穀物や冷凍された食肉などとの交換に用いるようになったのである。人類は、そのようにして、高次で巨大な「外臓」システムのようなものをつくり上げてきた。

私たち現代人は、食べ物だけでなく、あらゆる必要なものを外臓する世界に生きている。そのため、それらの財を交換によって入手するために必要な貨幣を手に入れる手立てをまずは確立せねばならない。その手立てには、人間が生きがいや生きる意味を見出すプロセスが伴ともなってくる。そこでは、ニーチェが言うように、仕事の悦よろこびなしに働くよりは、d 死んだほうがましだと考える人間も出てくる。

現代に生きる私たちは、生きるために食べるのではない。生きるために食べるために、それとは別個のもうひとつの手続きを踏むことによって生きている。それに対して、狩猟採集民は生きるために日々、森の中に、原野に、食べ物を探しに出かけるといわけだ。



人類の古くからのやり方と私たち現代人のやり方の間を行きつ戻りつ、戻りつ行きつしながら、私たちは、私たち現代人がどうしようもなくそうせざるをえなくなっているやり方について考えてみるができるのかもしれない。「未開」では、人間の古くからのやり方が、今日でも行われている。「未開」はすでになくなったというのは、ひとつの方便ほうべんにすぎない。その意味で、「未開から学ぶ」ことは、まだまだ、たくさんあるように思われる。

私は、文化人類学者として、二〇〇六年度に勤めていた大学の研究休暇で一年間、熱帯のプナンとともに暮らし、それ以降、春と夏の年二回のペースで彼らの居住地を訪問しつづけている。プナンは私たちと同時代に生き、現代世界に属しながら、

熱帯雨林を舞台として狩猟採集の暮らしを続け、ヒトが現生人類げんせいじんるいとなった原初の時代のやり方を日々おこなっている。

私にとって、毎回、プナンのフィールドに入って行くことは、夕ごはんのおかずを買うためにスーパーに買い物に行ったり、将来の目標をしっかりと立てて、毎日を大切に過ごしなさいと子どもたちに説き聞かせたり、メールやケータイを用いてコミユニケーションを取ったりするような現代日本の日常の世界から、そのようなことがまったく存在しなかったり、ほとんど意味をなさなかったりするもうひとつの生ある世界に浸りに行くことに他ならない。

私がワクワクするのは、「生きるために食べる」という、生の上に直截ちやくせつに関わる清々すがすがしいプナンの暮らしのありよう——とはいうものの、そこに何らの乱れがないというわけではない——の中に、現代社会に暮らしているあいだは想像してみるとすらなかった人間の生き方の断片を見つけることができるからである。

(奥野克己『ありがともごめんなさいもいらぬ 森の民と暮らして人類学者が考えたこと』による)

注 1 サゴ澱粉……サゴヤシというヤシ科の植物の幹から採取される澱粉。

2 ニーチェ……十九世紀ドイツの哲学者。

問一 【ア】 【オ】は文章の順序が違っています。論理的に正しい順序に並べ換えて、記号で答えなさい。ただし、【イ】は三番目にくるものとします。

問二 a ㄥ d に入れるのに最も適切な語を、それぞれ次のアㄥオの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同一の語を二度以上用いないこととします。

ア むしろ                    イ しかし                    ウ 例えば                    エ なぜなら                    オ さらに

問三 ——線部①「私たちの日常とプナンの日常」とありますが、この二つの日常にはどのような違いがありますか。その説明として最も適切なものを、次のアㄥオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちの日常は、世の中をよくするために仕事をするが、プナンの日常は他者のことは考えずに自分のことだけを考えて仕事をするという違い。

イ 私たちの日常は、生きていくための、食べるためのお金を稼ぐために仕事をするが、プナンの日常は生きることの中に意味を見出すのではなく、ただ生きるために食べるという違い。

ウ 私たちの日常は、生きるために、生き抜くために仕事をするが、プナンの日常は日々の中に生きがいや目標を見出しながら仕事をするという違い。

エ 私たちの日常は、毎日同じことを繰り返し、成功や失敗をしながら仕事をするが、プナンの日常は毎日の食事をするか、どこに漁をしに行くかなどその場しのぎで仕事をするという違い。

オ 私たちの日常は、決まったスケジュールをこなす機械的な日々が続くが、プナンの日常は、毎日何が起こるか分からず、その都度やるべきことを考えるなど場当たりの日々が続いているという違い。

問四 ——— 線部②「プナンの生き方」とありますが、筆者はプナンの生き方や暮らしをどのように捉とらえていますか。

【文章Ⅰ】の「◆◆◆」以降より、「プナンの暮らし。」に続くように十四字で抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

（十四字）  
プナンの暮らし。

問五 ——— 線部③「翻って」・⑤「援用」・⑧「方便」の本文中の意味として最も適切なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

③ 翻って …… ア これとは相対的に

イ これとは反対に

ウ これと同様に

エ これに追加して

オ これに類似して

⑤ 援用 …… ア 自分の主張の参考とし、師事すること

イ 自分の主張の問題点を指摘し、直すことを援助してくれること

ウ 自分の主張を正しく見せるため、先人の言葉を流用し、自分が言った言葉として用いること

エ 自分の主張の助けとするため、他者の意見を引用すること

オ 自分の主張の正しさを信じて疑わず、何らの支援を必要としないこと

⑧ 方便 …… ア 便利な方法や手法のこと

イ 物事の方向性や流れのこと

ウ それを知る手がかり

エ 生活の手段や生計を立てること

オ 意図を伝えるための便宜上の表現

問六 ———— 線部④「生きること以外の目標」とありますが、その例としてふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 空腹をしのぐために食べ物を手に入れるために生きること。

イ 何かを成し遂げるために生きること。

ウ 仕事に生きがいややりがいを見出して生きること。

エ 世の中を良くするために生きること。

オ 世界から貧困を撲滅するために生きること。

問七 ———— 線部⑥「内臓」、——— 線部⑦「外臓」について、華子さんは——— 線部⑥・⑦を含むここまでの本文の内容を整理するために〈メモ〉を作成しました。〈メモ〉の空欄に当てはまる語句をそれぞれ【文章Ⅰ】から抜き出しなさい。ただし、空欄Aは三十四字、空欄Bは二十四字、空欄Cは七字でそれぞれ抜き出すこと。句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

〈メモ〉

● 「内臓」・「外臓」について

狩猟採集民

生きるために食べる

「内臓」のみを用いて食行動を行う

← 線部⑥ 「内臓」とは… A (三十四字) こと

農耕民や牧畜民

身体の外側に食べ物を「外臓」するようになった

← 線部⑦ 「外臓」とは… B (二十四字) こと

農耕・牧畜革命を経た人類

← 高次で巨大な「外臓」システムをつくり上げてきた

貨幣のため、その貨幣を穀物などの交換に用いるようになった

生きるために食べるという C (七字) 現実を、別のものへとつくり替え、

別個のもうひとつの手続きを踏むことによって現代人は生きている

問八 次の会話は、華子さん、京子さんが【文章Ⅰ】の読後感を話し合ったものです。会話文に引かれた——線部A～Dで、本文に書かれた内容と合致しないものがあります。合致しないものを一つ選び、記号で答えなさい。

華子：プナンの人々の暮らしを知って、現代人の暮らしを見つめ直す良い機会になったね。<sup>A</sup>「生きるためには食べなければならぬ」という現実を現代に生きる人々は別のものにつくり替えてしまっているものね。

京子：現代社会で失われてしまった生き方や暮らしを、プナンの生活から学ぶことができる。私は感じたわ。自分たちの生きている世界を一度離れたところから見つめてみることも大切なことだと思う。<sup>B</sup>

華子：筆者もプナンの暮らしに浸ることは、現代社会に暮らしている間は想像してみることすらなかった人間の生き方の断片を見つめることができるからワクワクすると書いていたね。自分の知らない世界を覗いてみることは視野を広げるためにも大事なことだよ。

京子：筆者は現代社会に生きる私たちはやりがいや生きがいがないと仕事ができなくなり、仕事の悦びなしに働くよりは、むしろ死んだほうがましだと考える人間も出てくるなど現代社会の生き方よりプナンの生き方を肯定しているよね。<sup>C</sup>

華子：世界にはまだまだ「未開」と言われる場所があるよね。そこでは自分たちが知らないような古くからのやり方がまだ行われている場所があるはずだよ。<sup>D</sup>未開の場所の習慣や風習から現代人が学べることは多くあると思うよ。

京子：そうだね。現代社会について考察を深めるためにも、図書館で他の本も借りて読んでみよう。

問九 【文章Ⅰ】を読んだ京子さん、次の【文章Ⅱ】を読んで調べ学習に取り組みました。そして、【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】に書かれていることを、(ノート)にまとめました。これらを読み、次の(I)～(IV)の問いにそれぞれ答えなさい。

## 【文章Ⅱ】

消費社会を相対的に位置づけるために、それとは正反対の社会を紹介しよう。<sup>注1</sup>ボードリヤールも言及しているが、人類学者マーシャル・サーリンズ「1930-2031」は「原初のあふれる社会」という仮説を提示している。これは現代の狩猟採集民の研究を通じて、石器時代の経済の「豊かさ」を論証したものである。

狩猟採集民はほとんど物をもたない。道具は貸し借りする。計画的に食料を貯蔵したり生産したりもしない。なくなったら採りにいく。無計画な生活である。

彼らはしばしば、物を持たないから困窮しているとと言われる。そして、それは彼らの「未来に対する洞察力のなさ」こそが原因であると思われる。つまり、計画的に貯蔵したり生産したりする知恵がないために十分に物を持っていないとして、「文明人」たちから憐れみの目で眺められている。

しかし、これは実情から著しくかけ離れている。彼らはすこしも困窮していない。狩猟採集民は何も持たないから貧乏なのではなくて、むしろそれ故に自由である。「きわめて限られた物的所有物のおかげで、彼らは日々の必需品に関する心配からまったく免れており、生活を享受しているのである」。

また、彼らが未来に対する洞察力を欠き、貯蓄等の計画を知らないのは、知恵がないからではない。彼らのような生活では、単に未来を思い煩う必要がないのだ。

狩猟採集生活においては少ない労力で多くの物が手に入る。彼らは何らの経済的計画もせず、貯蔵もせず、すべてを一度に使い切る大変な浪費家である。だが、それは浪費することが許される経済的条件のなかに生きているからだ。

したがって狩猟採集民の社会は、一般に考えられているのとは反対に、物があふれる豊かな社会である。彼らが食料調達のために働くのは、だいたい一日三時間から四時間だという。サーリンズは、農耕民に囲まれていたけれども農業の採用を拒否してきた、ある狩猟採集民のことを紹介している。なぜ彼らは農業の採用を拒んできたのか？ 「そうならばもっとひどく働かねばならない」からだそうである。

もちろん狩猟採集民を過度に理想化してはならない。狩猟採集民もうまく食料調達ができないことはあろうし、環境の変化によって容易に困窮に陥ることはあろう（しかし、農耕民のほうがその可能性が高いとも言えるのだが……）。

重要なのは、彼らの生活の豊かさが浪費と結びついているということである。彼らは贅沢な暮らしを営んでいる。これが重要である。ボードリヤールやサーリンズも言うように、浪費できる社会こそが「豊かな社会」である。将来への気づかいの欠如と浪費性は「真の豊かさのしるし」、贅沢のしるしにほかならない。

消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われる。物が過剰である、と。しかしこれはまったくのまちがいである。サーリンズを援用しつつボードリヤールも言っているように、現代の消費社会を特徴づけるのは物の過剰ではなくて   である。消費社会では、物がありすぎるのではなくて、物がなすすぎるのだ。

なぜかと言えば、商品が消費者の必要によってではなく、生産者の事情で供給されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

（國分功一郎『暇と退屈の倫理学』による）

注 1 消費……【文章Ⅱ】の掲載部以前で、筆者は「消費」とは、物に付与された観念や意味を受け取ることで、限界がな

いたため満足をもたらさないものであると述べている。

2 ボードリヤール……フランスの哲学者、思想家であるジャン・ボードリヤール。

〈ノート〉

【文章Ⅰ】

「現代社会の暮らし」

↓ 生きていくために、食べるために仕事をする

⇔

「プナンの暮らし」

↓ 生きるために、生き抜くために食べようとする

【文章Ⅱ】

「消費社会」

↓ D

⇔

「狩猟採集民の社会」

↓ 物があふれる豊かな社会

【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の表現の共通点

↓ E

(I) — 線部「その可能性」とありますが、どのような可能性ですか。【文章Ⅱ】の言葉を用いてまとめなさい。

(II)  に入れるのに最も適切な語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一過性      イ 稀少性<sup>きしょう</sup>      ウ 可能性      エ 優位性      オ 多義性

(III) (ノート)の空欄Dに当てはまる語を、【文章Ⅱ】の中から八字で抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

(IV) (ノート)の空欄Eに当てはまる文として最適なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二つの同質的な社会や世界を比較して論じること、二つの社会に通じるものが浮かび上がるように表現している  
 イ 二つの同質的な社会や世界を比較して論じること、どちらの社会も優れていることを分かりやすく表現している  
 ウ 二つの対照的な社会や世界を比較して論じること、それぞれの社会の特徴を分かりやすく表現している  
 エ 二つの対照的な社会や世界を比較して論じること、どちらの社会でも生きぬくことが難しいことを表現している  
 オ 二つの対照的な社会や世界を比較して論じること、どちらの社会にも良い点と悪い点があることを表現している